

# 本道私学教育・服飾文化発展の先達者故浅井淑子先生

教授 古瀬卓男

## I はじめに

学園関係者はおもにより、本道各界に大きな衝撃を与えた、学園創始者浅井淑子先生の急逝以来、まもなく1年を迎えようとしている。淋しき悲しみは日とともに深まる。

現在では早逝ともいふべき短かい人生であったとはいえ、先生の北海道各界に残された功績は大きい。

異例の若さでの「北海道開発功労賞」による顕賞が、このことを物語っている。この顕賞記念として刊行される「受賞に輝く人々」の中に、学長梶浦善次先生の執筆による先生の伝記が掲載され、後世に残される。本稿は、研究紀要14号が先生の追悼号として発刊されることとなったのを機会に、先生の残された数々の功績を、学校教育・社会教育とのかかわりで把え、本道私学教育はおもにより、広く本道教育文化の発展の歴史の中に明確に位置づけることを目的としている。このことは、私学教育に携わる機会を与えて下さった先生、公私ともに特別なご指導、ご助言をいただいた先生に対する私の責務であるからに他ならない。

先生は、大正6年7月4日札幌市に生まれ、札幌師範学校附属小学校、東京国華高等女学校を経て、昭和14年6月東京ドレスメーカー女学院（現杉野学園ドレスメーカー女学院）師範科を卒業され、帰札された。

昭和14年9月、先生は洋裁教育を通じて女子の教養を高めること、及び専門的技術修得によって、女子に経済的独立の能力を得させることを目的にして、北海道長官の認可のもとに、各種学校「北海ドレスメーカー女学園」を創設された。以来昭和55年1月4日心筋梗塞により急逝されるまで、40年以上の長きにわたって、一貫して私立学校教育・経営の重責をにない、準学校法人、学校法人を設立し、理事・学園長として、終始私学教育振興のために粉骨砕身の努力を重ねられたのである。

この間、服飾文化向上のための啓蒙活動を精力的に続けられ、また各種の審議会委員、各種団体の役員として活躍され、本道的女子教育並びに専門的技術教育の振興に寄与された功績は多大なものがある。

先生は、豊かな教育的識見と重厚な人格、そして卓越した経営手腕によって、常に北海道私学教育界、服飾界の中心的存在として活躍され、以下に列挙する数多くの功績を残し、教育界はおもにより、社会的にも大きく貢献された。

## II 私学教育発展向上への貢献

先生の教育への係わりは、前述の如く、昭和14年9月6日父・渡辺政助氏より、札幌市中央区南

1条西5丁目所在の生家の一室の提供を得て、「北海ドレスメーカー女学園」を創設されたことに始まる。しかし、学園の発足は、先生の並々ならぬ「意志」に支えられてのものとはいえ、その最初より苦難に満ちたものであった。昭和13年4月1日にはすでに「国家総動員法」が公布されていたが、昭和14年には、5月20日ノモンハン事件、7月8日国民徴用令公布、そして9月3日には、ナチスドイツのポーランド侵入によって第二次世界大戦が発生している。次第に戦時色を濃厚にしていく時代を背景にして、先生の志すところとは逆に、洋裁教育そのものが困難になっていくが、昭和15年6月、校名を「北海道ドレスメーカー女学院」と改称の直後に、外国語排斥の社会的風潮と、それにおもねた行政当局の指導により、「北海洋裁専門女学院」と校名変更を余儀なくされている。

昭和18年10月23日の「教育ニ関スル戦時非常措置ニ関スル件」通達以来、相次ぐ命令、訓令、閣議決定が公布され、学徒の勤労動員は日常化されていくが、先生もまた、昭和18年6月25日以降、「北海洋裁専門女学院国民勤労報国隊」隊長として、教師3人学生30人を引率し、札幌軍需被服工業所において作業に従事されている。このことは、時代の要請に応ずることによって学院の存続を図り、洋裁教育の灯をともし続けんとする先生の思考の柔軟性を物語るものであるが、他面、昭和17年厚生省より婦人標準服5種が発表されるや、ただちにこれに準じて冠婚葬祭用の装いをデザイン制作するなど、貧困な世相に衣生活の美と用の目的を啓蒙し続けられた。このことは、先生がどれほど洋裁教育に、服飾文化の向上に、強固な意志をもっておられたかを示すものでもあろう。

戦後の各種学校は、昭和20年12月18日の回復措置に関する文部省学校教育局長通達（学発86号地方長官宛）によって再出発することとなるが、北海道においては、昭和19年北海道庁が各種学校に対する抑制措置をとったため、閉校が相次いでいた。

しかし、学院は先生の教育的情熱に支えられて教育内容がきわめて充実していたこと、あくまでもその存続を図らんとする先生の強い意志によって、当時の文教行政指導に柔軟に対応したので、戦時中も閉鎖命令を受けずに存続でき、このことが、先の回復措置通達とともに戦後の再出発を可能なものとしたのである。

以来、先生の卓越した見識と経営手腕と、さらに同学院の教育内容の水準の高さが相まって、着実な発展を続けた。当時、北海道内には女子高等教育機関は2校にすぎず、女子の教育要求は、入学資格を旧制高等女学校卒業以上とした同学院に向けられていた。このことは、昭和14年11人の卒業生を初めて社会に送り出した後、昭和23年702人、24年1,059人の卒業生を送り出していることから明らかである。その後も、毎年950人から1,200人と入学志願者、生徒数は増加の一途をたどっていた。生家の一室16.5m<sup>2</sup>を教室に改造して発足して以来、そのすべてを教室とし、さらに25年木造2階建校舎410.85m<sup>2</sup>、31年鉄筋コンクリート造4階建校舎1,815.78m<sup>2</sup>、42年鉄筋コンクリート造5階建校舎2,105.19m<sup>2</sup>を建設するなど、施設・設備は拡張整備され、教育内容も充実されて、女子の高等教育において、学校教育の補完的機能以上のものを期待された学院は、確実にその責任を果たしていた。戦後の混乱の中で、女子高等教育機関の殆どなかった当

時の北海道において、学院をここまで導かれた先生の功績はまことに大なるものがある。

先生は、昭和24年12月15日「私立学校法」が公布され、その第2条第2項において「私立学校とは学校法人の設置する学校」と規定されるや、この行政施策に対応しながら学院を一層発展充実させるためには、当然学校法人を設置すべきものとし、昭和26年6月18日全私財を投じて「準学校法人浅井学園」を設立し、その理事・学院長に就任された。以来12年間、学校運営の最高責任者である夫君、浅井猛理事長とともに、確固たる経営基盤を確立するために心血をそそぎ、学院を着実に発展させた。この発展は、単に財政面における発展だけではなく、これと並行して教育内容の飛躍的な充実が図られたことによるもので、これは先生の教育的見識の賜物として高く評価されるべき点であろう。

この教育課程の整備充実は、当時の「洋裁学校」のそれとは大きく異なり、女子高等教育機関の殆どなかった、当時の北海道における同学院の存在価値をきわめて大なるものとしたのである。現在までに合計28,700人の卒業生を送り出し、服飾界をはじめ社会の各分野に多くの人材を活躍させていることも故なしとしない。

同学院は、昭和30年代初頭までに、高等学校卒業を入学資格とし、修業年限各1年の本科・師範科・高等師範科の三科が完成し、教育課程も、単に洋裁技術の習得にとどまらず、被服概論・被服美学・意匠学・色彩学・スタイル画等の他、教育学・保健体育・文学・英語・フランス語等の各教科目が設定されていた。この教育課程の充実整備は、各種学校をして単に技能修得の場にとどまらず、一般教養科目の学習を通して、教養人養成の場に向せしめんとする先生の考えにもとづくものであり、ここに先生の先駆者としての見識がみられる。同時に、このことにより、当時すでに短期大学創設の教育的基盤が確立されていたともいえよう。

戦後、北海道総合開発が進められてゆく過程で、教育に要請された問題はきわめて重要なものがあつたが、その一つは、産業の振興開発のための有能な技術者の育成であり、そして二つには、「北海道的生活様式」確立のための知識と技能を持った、実践的な北海道人の育成であつた。

先生はこのことの明確な認識のもとに、昭和35年以降の短期大学大拡張期に入るとともに、短期大学設置の準備を着々と進め、昭和38年1月21日文部大臣の設置認可を得て、「学校法人浅井学園」を設立、理事・学園長となり、北海道女子短期大学を創立し、自ら教授、服飾美術科長を兼務して、率先してその発展に情熱的に全力を傾注された。実業教育振興、「北海道的生活様式」確立のための北海道人の育成という地域社会のニーズに応じて、学園を発展せしめた功績はまことに大なるものがあり、本道私学教育発展の歴史の中に特筆されるべきであろう。この間、昭和35年4月には、名寄市立女子短期大学助教授となり、道北地区の女子高等教育振興に寄与するとともに、高等教育の場にも実際の技能を導入することに尽力された。

なお、昭和46年11月には学校法人北海道浅井学園を設立し、その理事・学園長となり、江別市に大麻幼稚園、第二大麻幼稚園、旭川市に旭川調理専修学校を設置し、幼児教育・栄養教育などの面でも大きな功績を残された。

北海道女子短期大学は、昭和38年4月、被服科（昭和40年度より服飾美術科と科名変更）入学

生120人をもって発足した。当時北海道では、国立1校、公立1校、私立9校の短期大学が設置されていて、女子のみを入学させるものは、公立1校、私立6校であった。これら7校の中6校は、いずれも食物栄養科を含めて、家政系学科を有するものであった。しかし、本学服飾美術科は、前述のように、先生の教育的見識に培われた長い学園の伝統の基礎があり、服飾の総合美学的研究を目指すユニークさが注目され、逐年入学志願者が増加し、昭和41年1月には、文部大臣の認可を得て、入学定員を80人より200人と変更した。さらに先生は、当時の大学生急増に対応すべき社会的責任を考えられ、また北海道開発に当たっての教育開発先行の必要性、さらに、北海道における女子高等教育機関の不足、貧困さの解消を考えられて、同年工芸美術科・体育科（入学定員各100人）を設置された。これによって、同短期大学は三学科、入学総定員400人となり、同時に、札幌市より江別市に移転し、約12万m<sup>2</sup>の校地に、校舎本館約6,000m<sup>2</sup>、体育館約1,600m<sup>2</sup>、寄宿舎3,200m<sup>2</sup>、附属施設375m<sup>2</sup>が新築されて、同短期大学は飛躍的に発展した。

先生は、その後も常に、本道地域社会における高等教育に対する社会的ニーズについての調査研究に努められ、社会の要望の強い、小学校・幼稚園の女子教員の養成を目的として、昭和44年3月、初等教育学科（入学定員50人）設置、さらに昭和45年3月には、従来の体育科を保健体育科に改編して、当時北海道教育界に、その不足が最も深刻な問題であった養護教諭養成機関とされた。さらに昭和54年保健体育科100人を150人に、初等教育学科50人を100人に定員増し、また、昭和55年には、既設各科に置かれていた専攻科に加えて、専攻科初等教育専攻（入学定員20人）を設置された。しかもこの間、そのすぐれた運営手腕を発揮され、昭和50年・52年・54年・55年と、四次にわたって合計3,877m<sup>2</sup>の校舎を増築するなど、校舎の拡充整備、設備の充実、教官組織の整備などに努め、本道におけるモデル的な短期大学に育てあげられた。

設置以来16年の長きにわたり、学園長として、また理事としての先生の筆舌に尽しがたい教育、運営努力の継続と、行き届いた教職員への指導により、発足当時1学科、学生総数200人程度の小規模な同短大は、現在、4学科、学生総数1,650人、さらに各科とも修業年限1年の専攻科を有する大規模な短期大学に発展した。発足以来、6,500人の卒業生を社会に送り出して各方面に活躍させ、なかならず、本道初等中等教育界に約2,800人の卒業生を献身せしめ、本道教育界に貢献された功績はまことに大なるものがある。

長年本道私立学校教育振興に専念された功績は、昭和43年12月14日、私立学校教育功労者として、北海道知事表彰の栄に輝いている。

### Ⅲ 服飾文化向上への啓蒙活動と地域社会への貢献

40年以上に及ぶ先生の長い教育生活での一貫した教育方針は、単に机上の理論に留まらず、「実践する教育」に真価を認められるものであった。先生ご自身の服飾美術への飽くなき探求もまた、常に実践活動と表裏一体をなすものであった。この活動は戦後特にめざましいものであった。昭和22年12月、当時の藤女子高等女学校体育館で、戦後初のファッションショーを開催し、物資窮

乏時代に即応する「更正服」の合理性を説くとともに、服飾の美的表現法を一般に発表して、ゼロに戻されていた当時の北海道服飾文化の向上に鋭意邁進、社会の啓蒙に努められた。この方面への先生の強い使命感は、当時新設された母校東京ドレスメーカー女学院デザイナー養成科への入学、研究を決意せしめ、学院を夫君、そしてようやく陣容の整った教師各位にゆだねて上京、昭和25年10月より6カ月間、デザイナー養成についての研修に没頭された。

その成果は、昭和29年4月学院に高等師範科(現在のデザイナー科)の設置の因となり、これによって、高度化のきざしを呈していた当時の服飾デザイン教育が、北海道にはじめてもたらされたのである。先生は、自己の経営に係わる学院の発展向上に努力されただけでなく、昭和34年11月北海道各種学校教員能力認定委員会委員、昭和45年7月日本洋裁技術検定協会北海道支部副支部長、昭和46年2月日本洋裁技術検定協会試験委員に就任され、逝去されるまで、各種学校教育水準の向上、産業教育発展のために努められた。先生の長年の努力が、今日北海道はもとより、日本各地に服飾専門家としてすぐれた人材数千人を活躍せしめていることを思うと、服飾文化向上に果たした先生の功績の偉大さは、いい表わしようのないほどのものであろう。

先生は、昭和28年9月より約10カ月間、パリを中心に欧州11カ国を視察しておられる。研修課題を、服飾の専門分野と食・住に及ぶ研究並びに家庭教育の実情に定めて、知識と技能の吸収に専念された。特に北欧3国では、北海道と気候条件を同じくすることから「防寒着」の実際の研究に努められた。後年、先生ご自身このことについての回想として、次のように述べておられる。

「厳寒の中を北欧の人達はどんな服装をするのかこの目で確かめ……(中略)私も、北海道独自のものをと参考になるものを選んで仕入れ、レポートと写真をつけて毎日のように札幌に送りました。メーカーにも研究してもらわなければなりませんから……」(昭和53年11月8日朝日新聞)

先生の研究成果は、昭和29年9月5日より7日まで、札幌市民会館における「防寒着モードショー」として発表され、北海道民の冬の衣生活に対する思考変革に大きな影響を与えられた。昭和40年代に入って、北海道行政当局を中心に「北方圏交流運動」が進められてゆくが、この点で、先生の服飾文化向上に対する先見性が高く評価されるべきであろう。学校の教育・経営に、そして北海道地域社会の服飾文化の発展向上に、心身ともに休まることのない日々を送られた先生が、特に北海道の服飾産業界、服飾文化伸展の上に格別な寄与を果たされたのは、昭和29年10月、全国的な服飾専門家の連合組織である「日本デザイナークラブ(NDC)」を北海道にも誘致して、同クラブ北海道支部を設立し、自から初代支部長に就任、6期12年の長きにわたって、心血を注いでその重責を完全に果たされ、昭和51年からは、同クラブ本部副理事長として後進の指導に当たられたことであろう。

40年以上の長きにおよぶ先生の学校教育、産業教育、社会教育の各分野での多彩な活動と、それを通して培われた深い教育的識見、さらにその寛厚な人柄によって、昭和43年11月以来、北海道知事の委嘱のもとに、本道発展計画策定のための知事の諮問機関である北海道総合開発委員会委員となり、8年間にわたって、専門分野を通して本道開発に大きな功績を残された。昭和44

年8月より、北海道知事の諮問機関としての北海道婦人問題研究懇話会委員として、また昭和44年8月からは、産業教育振興法第10条にもとづく北海道産業教育審議会委員として、産業教育発展のための行政施策立案の中枢に参画して活躍された。昭和47年4月よりは、札幌市長の委嘱を受けて、地方青少年問題協議会設置法第5条にもとづく札幌市中央区青少年問題協議会委員に就任され、青少年の指導・育成のために貴重な提言もされた。

以上のような先生の多彩な功労は、昭和52年11月30日「札幌市民文化奨励賞」として、昭和55年9月2日「北海道開発功労賞」受賞によって顕賞されている。

#### Ⅳ お わ り に

先生は40年以上の長きにわたって、燃えるが如き情熱で教育にあたられ、一貫して本道私学教育、産業教育、そして社会文化の発展向上にその生涯を捧げられた。北海道の教育文化の発展の歴史をみると、先生が存在をぬきには語り得ない部分の大きさに、今更のように驚嘆せざるを得ない。その人格は極めて高潔で温容にあふれ、責任感が強く、多くの教育者、学生の尊敬と信頼を得ておられた。また学園長として、各学校の管理運営にもすぐれた才覚を示して、よくその重責を果たされたことも高く評価されるべきであろう。

きわめて広い教育に関する識見、中正な論説、常に実践者に対して果たされた指導的役割、また、その経営に係わる、短期大学における教員養成を通じての本道教育界の発展への寄与等々、本道の文化発展に捧げられた生涯は、正六位勲五等宝冠章の叙位叙勲の栄に輝いていて、冗説を要しない。

稿終えて今、果たして本稿が先生の偉大な功績を正しく扱えているかという不安と、追慕の念で一杯である。謹んでご冥福を祈る。